２０２３年社会科授業づくり講座【11 月講座】感想

テーマ：「君ならガマから出るか？2022 ひめゆり学徒隊と向き合う沖縄戦の授業」

＜講師より：高等学校教諭　柄澤　守さん＞

変則的な実践にもかかわらず、好意的に読み取って頂いた方が何人もいてうれしい限りです。私は高校よりも小中学校の実践に感銘を受けることが多いのですが、それは１時間の授業の中で子どもたちと徹底的に向き合う姿勢に共感するからだと思います。

高校の教員はどうしても生徒と距離をおき、長いスパンで物事を見るよう仕向けます。かつて「困難校」にいた時に、この手法がまったく通用せず立ち往生した末に、授業を一期一会と考えて少しずつ自分のスタイルが出来てきました。

お話ししたように、この授業を一般化できるとは思っていません。一期一会の教材を通じて、子どもたちが何を感じ、何を学んだのかを見ていただきたいです。

みなさんのご意見から気づかされたこともたくさんあります。この授業はまだ進化していきそうです。

＜参加者より＞

歴史学習で思考力を育てるにあたり、柄澤先生が「教科書に書かれている思考力の発問では本物の思考力は育たない」と仰っていたが、全くその通りであると感じた。特に小学校の教科書は、教員が順番通りに教えやすいものとなっており、思考力どころか誘導になっていると感じる部分も多いからである。

子どもたちが考えたいことを教科の枠にはめ込んで、それをはねのけていないかという考えについては、小学校の視点で他教科との連関について改めて見直すきっかけとなった。時間のなさを言い訳にして、考えたいことを考えられない授業では思考力は育たないので、単元内容で軽重をつけて柔軟に進めていくしかないと考えた。

自分で根拠をもとに説得を考え、グループ討議を経て、学習内容に対して「生徒一人一人が違う深まり方をした」と仰っていたが、その視点が今後授業をする上で重要な視点であると感じた。目標に対する内容をどの程度理解できているかで教員は評価しがちである。しかし、理解の深度は一様ではないため、子ども一人一人の学びの広がりに目を向けることが最も大切であると感じた。

柄澤先生の授業実践は初めて見ましたが、とても感動しました。とくに「放っておけない」という感覚をもたせて、正解のない解答を求める授業方針が素晴らしい。このように迫られると、過去の歴史は過去のものでなくなります。今自分はどうするか、という問いから離れられなくなります。

4 時間目の「説得力のある「説得」を選ぼう」のところで、④が一番得票が高い 12 票でした。これを柄澤先生は意外といわれ、教師がこだわる史料に基づかないものではないか、との疑問を呈されました。確かにそうですが、しかし、わたしは生き残った方の証言を読んで、そうでもないのではないか、と思いました。わたしが読んだ証言はなんだったか、Zoom の後に調べました。

岩波書店『世界』2008 年 1 月増刊号に載っていました。p.52 からの記事で、國森康弘さんの「元日本兵は何を語ったか」の中に、「小学三年生の男の子が叫んだ。「嫌だ。絶対死にたくない」。その声が

響くと、一五人ほど集まっていた家族、親族はそばにあった二つの手摺弾から距離を置いた（p. 64)」とあります。また p. 42 からの謝花直美さんの「証言者が語る「集団自決」」の記事中に「母親が「生ちかりーるうぇーかは、生ちゅしやさ（生きられるだけ生きよう)」と叫んだことがきっかけとなり、家族は 阿鼻叫喚の北山を後にした（p. 46)」とあります。

これらの証言は、現代の高校生が投票した感覚と合っているのではないでしょうか。

今回、授業づくり講座で柄澤守さんの沖縄戦の実践を聞き、時間をかけて一つの事象に対し、学習を行った経験が無かった自分にとっては新鮮なものであり、自分もこの授業を受けてみたいと思いました。また、実践での問いは、子どもが考えたくなる問いとして調べ学習を行い、過去の方と対話を行わせるなど自分で解決したくなるような発問が行われており、発問を作る教師側として参考になりました。

今回の授業実践では沖縄戦という題材であったものの、生徒には、現在行われているロシア・ウクライナ問題やパレスチナをめぐる問題などを考える力やどのように考えればよいのか、思案する方法を伝えられるものであると感じました。今回の社会科授業づくり講座を通して、取り上げられた沖縄戦やロシア・ウクライナ問題、パレスチナを巡る問題以外にも社会科に限らず教えなくてはいけない問題は様々あり、その題材を学校現場で、限られた時間の中でどのように生徒に伝えていけばよいのか考える必要があると考えました。

学生という立場でありますが、勉強しながら自分も考えていきたいと思います。

今回は社会科授業づくり講座に参加させていただき、誠にありがとうございました。

私が中学校や高校の授業で学んだのは戦勝中にひめゆり学徒隊がいたという事実のみで，沖縄戦においてどのように生き，亡くなっていったのかをお恥ずかしながら今回初めて知りました。
柄澤先生の実践についてお話を伺い，当時のひめゆり学徒隊の心理・行動について焦点を当てるという「自分ごと」「身近なこと」として考える授業という印象を受けました。紹介してくださった生徒の皆さんの考えからも学ぶことが多く，生徒の皆さんが持っている考え方や思いをどのように引きだすのかは教師の腕の見せ所だと考えました。

戦争について教えなければならないことはたくさんあります。しかしながら私は戦争が持つ様々な側面のどの部分を，どのように扱うべきか分からなくなることがあります。柄澤先生から現在の情勢について扱うことを避けるわけにはいかないこと，避けるべき内容と避けてはいけない内容を分けて考えることをアドバイス頂きました。教壇に立つという経験は教育実習のみで経験の乏しい私ですが，頂いたアドバイスをもとに自分なりの平和教育について限られた時間の中で生徒の皆さんに「戦争」について伝えるためにも，より良い授業について考え続けたいと思います。
貴重なお話を聞かせて頂き，ありがとうございました。

＜司会より＞

１１月講座もありがとうございました。今回は、沖縄戦当時の人々と現在の高校生による対話を試みた授業実践の報告でした。柄澤先生の「生徒が歴史をいかに自分事として捉え、学びに向かっていけるかが大切である」というお考えは生徒が社会科を学ぶ上で、また社会科を教える立場の教師においても重要なことであると感じました。また、そのためにも「問いのたて方」が授業そのもの方向性を決定づ

ける上で重要であることも認識しました。「問いのたて方」は、突き詰めるとものすごく奥が深いと思いますが、授業づくりを行う上で常に大切にしていきたいキーワードだなと改めて感じました。

次回の１月講座は、特別支援教育について実行委員の津田さんよりご報告させていただきます。通常級においても、特別支援教育を必要とする児童・生徒の割合が増えている現状からも、大変有意義な講座になるのではないかと思います。ご参加お待ちしております。